

# ミャンマー民主化運動伴走記 2023年版 ⑫



FEDERAL DEMOCRACY NEW YEAR (連邦制・民主主義の新年)を祝う年賀イラスト。Facebook 上で拡散された、希望のメッセージ。3本指に軍政打倒の決意が込められた素敵なデザインだけど、今年限りであってほしい。(写真: Unknown image)

サイレントストライキが始まる朝 10 時より前に、赤いペンキをぶちまけてデモをした若者たち。間違いなく普段より警戒が強まっている日に、こんな派手なパフォーマンスをするなんて。無事に生き抜いて、民主化後の新しい社会で力を発揮できますように。(写真: Myanmar Now より)

2023年06月08日 日刊ベリタ

## ミャンマー「夜明け」への闘い (36)

### Happy “Federal” New Year 西方 浩実

2022年1月8日。「Happy New Year!」とは、誰も言わなかった。恒例の打ち上げ花火も、爆竹の音もなかった。1月1日になった瞬間、「おめでとう」の代わりに響いたのは、「革命を成功させるぞ!」という数回のシュプレヒコール。ほんの数分、ヤンゴン中のいたる場所で鳴り響いた叫び声は、警察が駆けつけてくる前に、すぐに静まった。

・・・とはいえ、実はうちの周辺では2時間も前から、0時を待ちきれない子どもたちが何度もシュプレヒコールの練習をしていて、その上かわいい声で革命の歌まで歌ったりするものだから、微笑ましいやらハラハラするやら、私は落ち着かない大晦日を過ごしたのだった。

スマホには、ミャンマー人の友達から新年のメッセージが届く。今年の挨拶は「Happy “Federal” New Year!」。Federal、つまり「連邦制」(注)の新

年を祝う、今年流行りの挨拶らしい。なるほど、軍事クーデターや市民の虐殺など最悪のことが続いて、決してHappyな新年ではないけれど、そのクーデターの反発として生まれた新しい連邦国家の新年、と考えれば、笑顔で新しい1年を迎えられる。

「日本の会社で、働き手を探している人はいない?」新年早々、近所の大学生にそう尋ねられた。彼は田舎の出身で、大学に通うためにヤンゴンの叔母さんの家に下宿している。「うーん、今は日本人も少ないからなあ」と言葉を濁すと、「そうだよね、聞いてみただけなんだ」と彼はカラッと返事をした。

「今まで僕の日本語の教科書はNARUTO(アニメ)だったけど、今度こそ本格的に日本語を勉強しようと思ってるんだ。まずはN5だよ」。エヌゴ、とカタカナ発音をしてみせ、彼はにっこり笑う。「今のミャンマーには良い未来はないから、日本に行こう

と違って」。

21年2月にクーデターが起きたとき、彼は大学4年生だった。もう卒業論も提出していて、あとは口頭諮問と卒業証書を待つだけの身だったという。「先生もCDM（市民不服従運動）でいなくなったんだ。今は軍が大学を再開しようとしているけど、行く気がしないな。叔母さんも、僕が大学に戻れば軍の罠にはめられて逮捕される、って心配してるし。」

思わず神妙な顔になった私に気付かず、オハヨウ、タダイマ、ヤッター、と、知りうる限りの日本語を並べる彼の、うれしそうなお顔が救いだった。

ミャンマーの未来のために、命がけで武器をとる若者もいる。ミャンマーに未来はないと、外国を目指す若者もいる。どちらか片方が正しいわけではなく、それらは矛盾なく共存しているように見える。きっとそのどちらもが、未来への希望だからだろう。

どんな苦境に立たされても、嘆くばかりではなく、しなやかに前向きに生き抜くメンタリティ。すごいなあと妙に感動してしまう。

CDMのために保健省を解雇された友人の医師に会った。クーデター以降収入がない彼女は、両親の家に身を寄せながら職を探していたが、相変わらず就職先は全く見つからないという。「この間、私の専門ド真ん中の求人があったの。だから自分がどれだけ適任かを熱く綴って応募したんだけど、書類選考さえ通らなかった」。

それでも、自分たちの世代はまだいいのだ、と彼女は言う。「かわいそうなのは、まだ卒業して間もない医師たちだよ。病院で患者さんを診る機会もなく、専門医の資格もとれず、留学のチャンスも奪われてしまった。私はこの民主化された5年間で、国費留学生として大学院に行けた。恵まれていると思うよ」

そんなかわいそうな若手医師に対して、民主派の政府NUG（国民統一政府）はオンライン研修を始めている。上限1,000人の大規模な研修だが、定員オーバーで入れなかった人も多いという。おもしろいのは、受講者の中にCDMに参加しなかった（つまり軍政側と見なされている）医師も参加していること。Zoomで名前や顔がわかるため「なんでこいつが？」という人の存在がすぐにバレて、スクリーンショットが拡散されているようだ。

その人たちも勉強したいの？それともスパイなの？と聞くと、友人は「さあね」と苦笑した。「わからないけど、Zoomのプライベートメッセージ機能で、そういう人たちからメッセージを受け取った医師はいるみたいよ。「患者さんが待っているから戻ってきて」って。あっち側の人たちはいつもそう言うの」。軍は公務員たちに「解雇する」「逮捕するぞ」と脅しつけてきた一方で、情に訴えて懐柔するよう目論んでいるのだという。

「こんな考え方もある」と、横にいた別の友人が口を挟む。「研修に参加している、CDM不参加の医者たちは、自分がCDMに参加しなかったことを隠したいんだと思う。つまりNUGの研修に出るのはカムフラージュだ。」

え、CDMに参加したフリをしているってこと？「うん、そういう人はけっこういるんだ。例えば、CDMをやめて職場に戻ったあとも、ドラマチックなCDMのストーリーを練り上げて、自分の体験談としてFacebookに投稿したりね。彼らは民主派からのソーシャルパニッシュメント（注2）を怖がっているんだろう。」

「そういえばMytel（軍系の通信会社）で働いている親戚も、勤務先を隠しているよ。絶対に会社のユニフォームを着たまま外に出ないし、行き帰りも少し離れたバス停からバスに乗ってる」。

反軍政を掲げれば、軍に捕まる。かといって軍政側につくと、社会的に孤立する。人々は、複雑化した人間関係を水面下に押し隠して、何食わぬ顔でおとなしく生活をしている。少なくとも外国人の私には、そう見える。そして、ひとたびサイレントストライキやお正月のシュプレヒコールが呼びかけられると、驚くほどの人数が、水面下に隠していた団結力を発揮するのだ。

さて、医療者不足に悩む軍政は、なんとか人材を確保しようとあの手この手を繰り出している。まず、医大に入るためのハードルをぐっと下げた。ミャンマーでは高校の卒業試験のスコアによって、選べる学部が決まるシステムだ。この試験で最高レベルの得点をとれなければ、医学部に入ることはできない。

「クーデター以前は、すべての教科で高得点をとらなければ、医師にはなれなかった。でも軍政府は、英語と生物と物理の3科目だけ良い点を取ればいい、

というルールに変えたの」。医師の友人たちは、勘弁してよ、と呆れたように笑う。「医学はとても難しいし、人の命を預かる責任ある仕事だよ。そんな基準で、数さえ増やせばいいなんて考え方、うまくいくわけがないよ。この国の医学のレベルが、また下がってしまう」

見えないところで、静かに変わりゆくミャンマー。死者や負傷者の数だけでは表せない、未来へと引き継がれる負の遺産。それでも同僚たちはこう言って笑った。「2022年こそ民主主義を取り戻すぞ。最後は僕らが勝つんだ」

その言葉に頷きながら、心の中で3本指を立てる。クーデター以来、軍政を相手に圧倒的に不利な形勢は変わらない。それでも2022年も、彼らを信じ、彼らとともにありたいと思う。

2023年06月23日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い(37)

## クーデターから一年目の沈黙 西方 浩実

2月1日。ヤンゴンには静かだった。半月ほど前からオンライン上で呼びかけられていた「サイレントストライキ」は、武力衝突が起きている国とは思えないような、とても平和な抵抗だった。

「朝10時から夕方4時まで、みんな家の中にいよう」

「夕方4時になったら外に出て、みんなで拍手してストライキ成功を祝おう」

ベランダから見上げた2月1日の空は、青く澄んでいた。街はいつもより静かなおかげで、鳥の声がよく響いていて、抑圧されている現実が悪い夢だったかのようにピースフルだった。

軍は1月後半、サイレントストライキが発表されるやいなや、ストライキ阻止に動き出した。まず「ストライキ」に参加したら逮捕する』という、もはやおなじみとなった通達を出した。おかげでこの日だけは、家にいる方が危険、という妙な状態になった。家にいようがいまいが個人の勝手なのだが、そうした自由が許されないのが今のミャンマーだ。

注 1. クーデターのあと、軍事政権に対抗して立ち上がった民主派の政府が目指すのが「連邦制」の新国家建設。これまで軍事政権下で抑圧されてきた少数民族との連携や、地方自治の強化が掲げられている。例えば少数民族が多く暮らす州も含め、各州に独自の立法・行政・司法機関、徴税権、天然資源の管理権などを認めるなど。

2. 直訳すると「社会的制裁」。軍支持派やCDMに参加しなかった公務員、クーデター後も軍から利益を得ている人などに対し、法的な処罰などではなく、社会的に懲罰を加えようとする動き。クーデター直後から民主派の中で広がった反軍政活動の一環と言える。具体的には、友人関係を断つ、兵士や警官などにものを売らない、軍支持派の店ではものを買わない、デモ隊を撃った警官やダラン(軍への情報提供者)などの個人情報さらすなど、様々な方法が用いられた。

さらに、鍋叩きをやろうという動きが広まると、「鍋を叩いたら反逆罪を課す」とのアナウンス。この反逆罪の最高刑は、死刑だ(名ばかりの裁判はあるものの、実際はまだ逮捕されていない人にさえ先に死刑宣告が出る始末)。こんなのはただの脅しだ、と思うものの、たとえ拘束されればどんな濡れ衣で拷問を受けるかわからないのだから、気にならないといえば嘘になる。

おまけに、念入りなことには、ヤンゴンでは前日に警察が街を回り、市場や商店で写真を撮ったり店主の名前を記録して回ったりして、店を閉めるなどという圧力をかけてまわっていた。店を閉めたら、どうなるの?と同僚に聞くと、彼は「さあね」と苦笑した。「店主が逮捕されるか、営業許可を取り消されるか、嫌がらせを受けるか。何されるかわかったもんじゃないよ。すべては彼らの思いのままだもの。」

軍のやり方を知り尽くしたミャンマー人たちは、店の状況をよく理解した。路上の麺屋さんでは、「お

客さんは来ないから、仕込みは最低限にしまよ」などとアドバイスが飛び、Facebook 上では「店は開けても、お客さんが行かなければいい」「全部売り切れたことにすればいい」と抜け道が次々と提案され、大喜利のようになっていた。

軍の脅しが一定程度効いたのか、その日、街は完璧なサイレントにはならなかった。私の自宅周囲も、いつもよりずっと人は少なかったものの完全に無人にはならず、バスや車の走る音が大通りから聞こえてきたし、フードデリバリーも動いているようだった。

ピタリと時間が止まったような 12 月のサイレントストライキ（注）と比べると、やや中途半端な印象は否めなかったけれど、それでもサイレントデモが終わる夕方 4 時になると人々がワラワラと家から出てきて、周囲には拍手の音があふれた。友人からは、「We did it!（やってやったぜ!）」とメッセージが届く。

地方の友人からも、「そっちはどう?」と電話がきた。さっき拍手が起きたところだよ、と伝えると、彼は満足げに「よーし」と笑った。あれこれ話したあと、彼はこんな風に言った。「サイレントストライキは、地味な抵抗だと思うだろう。だけどこれは、国民がみんな同じ気持ちをもっていないと成功しないんだ。軍の支配なんてだれも望んでない、という強烈なメッセージなんだよ。僕らはそれを成功させたんだ」

そして、こう付け加えた。「こんなにもたくさんの方が、軍政に NO と意思表示している。軍と同じようにお金と武器があれば、絶対にすぐに勝つのになあ」

翌日、オフィスで同僚たちと「そっちはどうだった?」と、それぞれの自宅周囲の様子を報告し合う。どの顔にも、ちょっとした誇らしさが見えていた。「サイレントストライキは成功だ。軍に脅されても、これだけやったんだ。満足しているよ」

サイレントストライキが呼びかけられる前、SNS 上では、もっと視覚的に見てわかるような、抗議デモのようなアピールをすべきではないか、という声もあったという。しかしそれは、少なからぬ人の命が奪われることと直結している。「だから最終的には、みんなサイレントストライキに参加したんだよ。

納得していようがまいが、それしか道がないからね」

同僚はそう言ったあと、「私たちの意思は、日本にも伝わるかな」と私に尋ねた。きっと伝わると思うよ。クーデターからちょうど 1 年だからミャンマーの特番も増えているし、国会議員や在日ミャンマー人たちも話し合いを続けているよ。私がそう答えると、彼はこう言って笑った。「そうか、ありがとう。そろそろ具体的な後押しがあると嬉しいな。正直なところ、もう声明は十分なんだ」

同日、人々が沈黙して引きこもっているのをいいことに、軍は「軍支持派」のデモを組織した。民主派の市民がデモをやると警察車両に轢き殺されるのに、軍支持派のデモとなると、同じ警察車両がデモ隊を護衛する。そういう国なのだとわかっていても、やはりため息が出てしまう。

ねえ、あの人たちって本当に軍を支持しているの?と聞くと、友達は「まさか!」と声をあげて笑った。「お金だよ。貧しくて政治を知らない人たちを、軍が買収しているの。日雇い 5000 チャット（約 325 円）だから、私たちは彼らを「ガータウンサー（5000 チャットを食べる人）」って呼んでるんだよ」

こうやってお金で人を動員するのも、軍のいつものやり方だ。そもそも軍の兵士たちも、最初は経済的な利益を求めて入隊した人が多いのだという。特に下級兵士は、政治のことなど何も知らない貧しい農民が多いそうだ。家族の誰かが軍に入隊すれば、一家で軍の宿舎に移り住み、軍の学校、軍の病院、軍の商店、と人生はすべて「軍製」のもので完結できる。これで一家は安泰、もう軍を離れることはできない、というわけだ。民主化運動に熱心なカレン族の友人も「学生の頃、僕も親から軍に入隊を勧められたよ。あの時入らなくて本当に良かった」と笑っていた。

2 月 1 日が過ぎ去ると、どっと疲労感に襲われた。あの日から、1 年が経ってしまった。自国民を虐殺するようなメチャクチャな政府が、まさか続かない。世界が許すはずがない。そう思っていたのに。

ミャンマー人の友人に、「ねえ 1 年だよ。疲れない?」とボヤくと、こんな答えが返ってきた。「私も昨日、同じことを考えていたの。この 1 年、私た



ちは何度も立ち上がり、声をあげ続け、たくさんの犠牲を払ってきた。でも変わらない。この状態で1年…。もう軍政を受け入れるべきなのか？って。でも、ダメ。答えは絶対にNoだよ」

他にもあなたみたいに、軍政を受け入れるべきか、と考える人はいるの？「考えるだけなら、ほかにもいると思うよ。口には出さないからわからないけどね」。たぶん、と彼女は言った。「もうダメだ、と思う人がいるとしたら、生活がギリギリの人たちだろうね。生活が苦しいから、というだけじゃなくて、情報がないから」

どうということ？と聞くと、こんな説明が返ってきた。「日々スマホでSNSを見ているような人は、いろんなニュースを見るでしょう？それで、PDF（国民防衛隊）が軍との戦闘を続けていることに励まされたり、軍のひどい行為を見て、絶対に許せないと思

ったりする。そういう支えがない人は、きつともっとネガティブになっていると思う」

それから彼女は、きっぱりと言った。「だけど、少なくとも私たちは、何が起きているか知っている。諦めるわけにはいかないよ。ここで何もせずに軍に従ったら、次の世代がかわいそうなもの。私たちが、軍政下で育った最後の世代。必ずそうするからね」

注・2021年12月10日、世界人権デーに合わせてサイレントストライキが実施された。その5日前、ヤンゴンでデモ隊が轢き殺されるという衝撃的な事件（33回『Freedom from Fear』参照）が起きたことを受け、ミャンマー全土の人々がこの沈黙のストライキに参加した。人通りが完全に途絶えた街の様子は、国際ニュース等でも報道された。

2023年06月30日 日刊ベリタ

ミャンマー「夜明け」への闘い（38）

## 慢性的停電と軍の蛮行情報のなかで日常はつづく 西方 浩実

3月13日。「おはよう。昨夜は電気きた？」。最近、朝の挨拶とともに、電力事情の共有をするのがお約束になっている。とにかく毎日、街中のあちこちで停電しまくっているからだ。もともと水力発電が主力のヤンゴンでは、乾季（11月～5月）になると水不足のため、停電が多い。だがそれにしても、今年は異常だ。たとえば先週のある日、私の自宅のあるエリアでは、正午に停電してから深夜まで、電気が供給されていたのはわずか2時間半だった。

「クーデター後、ミンアウンフラインは市内バスを電気自動車にする、とか息巻いてたけど、家の電気さえついてないのに、どうやって実現するつもりだろうね」そんなことを言い合い、友人たちは苦笑する。

軍はこの停電の理由をどう説明しているの？と聞くと、こんな答えが返ってきた。「ひとつは水不足。もうひとつは、PDF（国民防衛隊）が各地で電力関係の施設を攻撃しているからだ、って。でも、本当は

そうじゃない。水不足は毎年のことだし、電力施設への攻撃だって、こんな大ダメージを与えられる規模じゃない」「軍は、国民の生活は自分たち次第だ、ということ誇示したいんだよ。この停電は、軍に従え、という無言のメッセージだ」

そう考える人が多いことを裏付けるように、別の友人からもこんな言葉を聞いた。「停電はまあ大変ではあるけど、過剰反応しないようにしてる。そうやって人々を困らせることが、軍の目的だからね」

とはいえ、電気がないのは現実的な問題である。いちばん困るのは、水が使えなくなることだ。ミャンマーの一般的な住宅では、屋根の上などに水のタンクがあり、そこまで電動ポンプで水を汲み上げておかないと、水道水が出ない仕組みなのだ。同僚たちは、電気や水がないとどんなに大変か、という笑い話で盛り上がる。

「停電すると、子どもがオンライン授業に参加できないの。電気が戻ってようやく授業に復帰でき

た！と思ったら、今度は先生の家が停電よ。この調子じゃカリキュラムが終わるまで、数年かかるわ」

「タンクの水がいつなくなるかと思うと心配で、もうトイレ1回流すのも惜しいわけ。だから自分が用を足したら「トイレ行く人！」って子どもたちを呼んで、まとめて済ませて最後に一度だけ流すの。これが停電時代のニューノーマルってやつね」

真面目にやってるんだから！と大笑いしながら話す、そんな時間に、やるせない日常への不満がゆるりと溶けていく。

ヤンゴンでは、給水車が出動して水を配っているという。給水車なんて災害時にしか見たことないよ、と私が言うと「20年くらい前には、こういう給水車はよく出ていたよ」と、友人は笑う。20年前の電力事情に戻ったかと思うと、ため息もつきたくなるが、「昔もそうだったよね」と言えるたくましいメンタリティは、さすがミャンマー人だ。

停電の影響は他にもある。頻発する停電のおかげでジェネレーターの稼働が増え、そこにウクライナ問題も重なり、石油代が跳ね上がったのだ。クーデター前は、1リットル650チャット(50円)程度だった車のガソリンは、先週は2100チャット(約135円)と、たった1年で3倍近くになった。ガソリン車を使っているタクシーの運転手は、商売上がったんだよ、と不満をこぼす。

軍はさらに追い討ちをかけるように、12日～18日までの1週間は、24時間停電になると発表した。耳を疑うような話に、えっ、嘘でしょ・・・と戸惑っていると、友人たちからは、「大丈夫、軍のハツタリだよ」と余裕の一言が返ってきた。「24時間停電、と言われていたのに12時間で済めば国民は、ああ有難い、と軍政への評価を上げるだろう、と軍は思っているんだよ。笑っちゃうよね。でも軍はいつだってそうなんだ」(注)。

地方での戦闘は、変わらず続いている。どこの町で国軍兵士が何人死んだ、とか、どこの村が焼かれた、などのニュースが、毎日オンライン上に流れてくる。特に北部のザガイン管区は軍のターゲットになっていて、多数の村が炎に巻かれ、子どもを含むふつうの村人たちが殺されたり、避難民となって逃げたりしている。しかもインターネットが広範囲で制限されており、完全な実態は誰にもわからないの

だという。

村に火をつけ、灰燼に帰す。それは許しがたい愚行だ。それなのに、こうしたニュースはもはや日常化してしまい、心のアンテナが麻痺状態に陥っている。

ヤンゴンでは2月中旬頃から、街中をうろつく兵士や警察の人数が減った。最後に厳戒態勢が見られたのは1ヶ月前、2月12日のユニオンデーあたりだろうか。あの日、軍政はなんと90億チャット(約5億8千万円!)もの予算をかけて、ヤンゴンや首都ネピトーで華やかな式典を行った。

市民たちは当然憤ったけれど、「これはただの嫌がらせだ」「反応せずに無視しよう」という結論に至った。かくして式典はつつがなく執り行われ、国営メディアにはご立派なパレードの様子が掲載された。

そんな日常を、人々は暮らしている。頻発する停電に振り回されながら、あるいは軍の愚行に憤りながら、仕事をしたり買い物したり、たまには遊びに出かけたりして、1日1日を過ごしている。みんな、生きていかねばならないのだ。

だけどヤンゴンで日々を過ごしていると、軍政打倒に命を捧げる若者や、軍に家を燃やされた避難民と、その軍政下で送られるヤンゴン生活とのギャップが、だんだん大きくなっていく感じがする。そして時おり不安が胸をよぎる。このまま状況が膠着して、軍事独裁が固定してしまうのではないか――。

同僚にそんな心情を吐露すると、彼は優しく笑いながら答えた。「わかるよ。僕は平和を望んでいるけど、この状況で平和になると、それはそれで落ち着かないんだ」。別の友人も、「ヤンゴンでも何か起きてくれた方が、まだ気持ちが楽だよ」とこぼした。

2022年3月現在、ヤンゴンは私にとって、少なくとも「危険」な場所ではない。もちろんたまに爆発音を聞くことはあるし、警察が街のいたるところにバリケードを張っている。トラックの荷台に乗った兵士は、相変わらずこちらに銃口を向けている。だけど、昨年の中頃、すぐそこで抗議の叫びをあげるデモ隊に実弾が撃ち込まれていたことを思えば、日常生活における緊張感はほとんどないに等しい。

それでも、時々自分たちが軍の監視下にあるのだ

と思知らされる瞬間がある。

例えば、メディアの取材だ。先月、ヤンゴンにやってきた日本のテレビ局に、ミャンマー人の知り合いを紹介してほしいと頼まれた。そこで、近所に住んでいる青年に声をかけてみることにした。

彼は大学4年生だったが、クーデター後、大学教員のCDM(軍に対する不服従運動。公務員による全国的なストライキ)によって大学が閉鎖してしまい、未だに卒業できずにいる。つまりクーデターの間接的な被害者なのだ。

ところが、取材の話を持ち出すと、彼の母親が顔色を変えた。「海外のテレビ局と会うなんて絶対にダメ。軍はメディアの動きを見張っているはずよ。取材なんて受けたら、息子は何をされるかわからないわ」

彼女は真剣な顔で「あなたもメディアの人とは会わない方がいい、目をつけられてしまうから」と、私に何度も念を押した。そしてこわばった顔のまま「覚えておいて。軍はあなたが思うより残酷よ」と私の目をじっと見て言った。

友人たちは、数ヶ月前から「NUG」「PDF」「アウンサンスーチー」などの単語をあまり口にしなくなった。どこで誰が聞いているかわからないからだ。私も自然と、そういう単語を口にするときは、周囲の様子を伺いながら声をひそめて話すようになった。

そんな風に、人々はいつもどこか警戒しながら日々を暮らしている。「言いたいことも言えないなんて本当にやるせないよね」と憤る私を、しかし、同僚は笑い飛ばした。「はは、黙っているふりをしているけど、言えるところでは文句を言ってガス抜きしてるさ。僕たちは民主化前まで、ずっとそうやって暮らしてきた。しかも今はFacebookもある。軍はどうやったって僕らを黙らせることはできないん

だ」。彼らのチャーミングな笑顔に、ミャンマーの人々のたくましさが見える。

ミャンマーはどうなっていくんだろう……。悶々とした気持ちになっている私に、友人はこんな風に話した。「NUGが、国際社会からかなりの金額を集めているらしいの。避難民への食料や医療、人道支援に使うんだって。でも私は、軍との武装闘争に使う武器を買ってくれないかと期待しているの。もちろん公に『武器を買います』とは言えないだろうけど……でも軍を倒すにはどうしても必要なもの」

別の友人は、こんな心情を話してくれた。「欧米は、ウクライナにはすぐ武器を支援したでしょう。ミャンマーだって、同じように不条理な目にあって、必死に抵抗している。でも国際社会は助けてくれない。がっかりしたよ。……でもまあ、仕方ない。自分たちでやるしかないね」

ヤンゴンの人々の暮らしを表面だけ眺めると、反軍政の炎は一見鎮まったかのように見える。だけど人々と話してみれば、彼らの決意は、以前と何ひとつ変わらない。いくら軍が支配を強めたように見えても、市民の心は決して支配されず、まっすぐ軍政打倒に向かっている。

偽りの平和の下、人々の心の中で静かに燃え続ける、反軍政への熾火。彼らが民主主義を取り戻し、本当の平和が訪れる日を信じて、祈る。

注・ミャンマーの祝日。1947年のこの日、イギリスの植民地からの独立を果たしたミャンマーで、少数民族の代表者らと、暫定政府代表のアウンサン将軍との間でパンロン協定が結ばれ、連邦国家として運営していくことに合意した。毎年、諸民族の代表を招待して記念式典が行われる。

ミャンマー「夜明け」への闘い（最終回）

友人たちへの心からの感謝と「革命」必勝信じて 西方 浩実

2022年4月。日本への帰国が決まった、と伝えると、友人は「えーっ！」と叫び、口をとがらせて言った。「今帰っちゃったら、私たちが軍に勝つところ見られないじゃん!」。でも、それからすぐに思い直したように、笑ってこう言った。「だけど今はミャンマーにいてもいいことないから、日本に帰ったほうがいいよ。私たちが勝って平和になったら、また戻ってきて」

早くミャンマーを出たほうがいい。ここは安全じゃないし、希望もないから。ミャンマーの友人や同僚にお別れの挨拶をするたびに、まるで示し合わせたかのように、みんな同じことを言った。その度に私は、そんなことはない、確かに軍政は最悪だけどミャンマーは素晴らしい国だ、とムキになって言い返した。「チェズーバー（ありがとう）」と、友人たちは穏やかに微笑む。自分の国を愛する外国人に「早くこの国を去ったほうがいい」と言わねばならない友人たちの心中を思うと、切なさに胸が詰まった。

空港に向かう道すがら、早朝の街路脇にはパダウがポツポツと濃黄色の花をつけはじめていた。パダウは4月、雨が降ったあとに咲く、ミャンマーの新年を告げる花だ。

ミャンマーのお正月といえば、みんな大好き『水かけ祭』。かつて数十年もの間、たった一度しか中止されたことがないというこの祭は、一昨年はコロナ、昨年はクーデターのために、2年連続で異例の中止となった。軍は昨年につき、今年も「軍政下の平和なミャンマー」を装うべく、ヤンゴン市役所前に大きな特設ステージを立ててお祭りの準備を進めている。ここで楽しく盛り上がる様子を国営テレビや国営新聞で伝え、ミャンマーの国内が安定していることをPRしようという目論見だ。

だが人々はもちろん、その手には乗らない。友人たちは「水かけはやらない」と口を揃えた。私がミャンマーに来たばかりの頃、目を輝かせて水かけ祭の楽しさを教えてくれた同僚も「絶対参加しない」

と断言し、それを残念がる様子すら見せなかった。そのかわり、彼はニツと笑ってこう言った。「今年こそ軍に勝って、来年は派手にやるぞ。来年4月、ミャンマーに戻ってくる準備をしておいてくれよ!」。了解、と笑い返し、こっそりと3本指を立て合う。

今も武力での抵抗が続くミャンマー。こんなメチャクチャな軍事政権など続くはずがない、という当初の希望に反し、人々の闘いは今も続いている。クーデター前まで都会で楽しく大学生活を送っていた若者たちの一部は、今日も慣れない銃を手に、40万人規模ともいわれる軍とゲリラ戦を続けている。「春の革命」と名付けられたこの民主化運動において、彼らは人々の希望の光だ。

農村地帯には、私が支援しているPDF（国民防衛隊）の医療チームがある。武力闘争の帰結として、前線では傷を負い、命を落とす人々がいる。そうした人々がひとりでも多く救われることを願い、微力ながら支援を続けてきた。

彼らから定期的に送られてくる写真には、直視できないほど酷いものも多い。火傷で広範囲に失われた皮膚。顎を吹き飛ばされた頭部。原型をとどめない手足。武力を用いて戦うということはこういうことなのだ、と嫌でも思い知らされる。それでも、その先にあるはずの民主主義を、自由な未来を胸に、人々は戦う。無数の痛々しい写真の中で、身体の一部を失った青年が笑っている。後悔はしていない、と言う。何が正解か、私にはもうわからない。ただ、武力行使のほかに希望がないということがあるのだと、私はミャンマーで思い知った。

実を言うと、医療支援を続ける一方で、私は何度か武器を買うための支援もした。軍の兵士を殺すための寄付だ。誰の命も平等である、という当たり前の倫理観に目をつぶり、民主主義の国をつくり直すプロセスを支援しているのだ、と自分に言い聞かせた。それでも、やっぱり間違っていたのではないかと未だに考える。途上国の人々の命を救いたい、と



いう思いで国際協力の仕事について、いったい何をやっているんだろう、と。だけど、武器がないから逃げ回っている、という PDF の話を聞いて、見て見ぬ振りはできなかったのだ。あの時どうすべきだったのか、たとえ数十年後の未来から振り返っても、わからないかもしれない。

ミャンマーの未来は、まだ見えない。軍は民主派を徹底的に叩き潰し、民主派は軍を完全に解体しようとする。どちらも譲歩や和解などありえないという態度だし、私も民主派を支援する一人として、軍に妥協する余地などないと思う。だが一方で、分裂した国をひとつにするときには、本当は汚い取引や談合が必要なのだらうとも思う。国際社会からの後押しも得られない中で、100 対 0 での民主派の完全勝利は叶うのだろうか。ミャンマーの友人たちの「絶対勝つよ」という自信に満ちた笑顔に励まされつつ、「どうやって?」という残酷な質問を飲み込む。

それでもミャンマーの人たちは、きっとゴールに続く道を見つけるだろう。彼らは、未来を切り開くのは自分たち自身だと覚悟している。非暴力が戦略として有効でないと判断した時に、速やかに武力での反撃に切り替えたように、彼らは柔軟に手段をかえながら革命を成就させるだろう。その道のりはおそらくまだ長いけれど、一人でも多くの日本人が彼らの姿を見つめ続け、応援してくれたらと願う。私も、時にどうしようもないやるせなさを抱えながら、これで良いのかと自問を繰り返しながら、彼らとともにありたいと思う。

最後に、言葉を尽くして思いを語ってくれたミャンマーの大切な友人たちに、心からの感謝を。

より良い未来を信じて立ち上がり続ける人々を、心から尊敬します。必ず勝つと信じています。

